

2017-09-18

最近、週刊新潮で、漢方薬についてセンセーショナルな記事が掲載されたようで、これに対して、患者様から、「不安を感じている」というご意見を頂いたので、ブログに書きま

記事を読んでもみましたが、まず、今までのところ、記事で取り上げられている副作用というものは、「漢方を専門に診療している医師であれば、誰しものが当然知っているものであり、常にそれを頭の片隅に置いて診療している」ことはお伝えしておきます。

そして、それらは、念頭に置いて、症状から副作用と疑い、早めに対応を取れば大事には至らないものが多いです。(もちろん医療は100%完璧ではないので、不可避なものもあります)

副作用というものは、当然、常に、どの薬やどの治療でも起こりうる可能性があるものであり、その頻度や重症度というものが問題となるわけです。

医療に於いては、メリットとデメリット(もしくはベネフィットとリスク)を天秤にかけて、患者様と相談しながら、投薬や治療を行うか行わないかを決めるわけです。もちろんその結果、「何もしないで様子を見る」ということも起こり得ます。

医療従事者の仕事は、「患者様がどうしたいのか? その意思決定のお手伝い、またそれに沿った治療」をしているだけであるという側面もあります。

記事の内容の細部に関しては、けっこう理論が飛躍・破綻している部分もあり、ここでは専門的になりすぎるので、そのことには触れませんが(もし機会があれば、直接コメントしている“専門家”に質問しようと思いますが)、こういう記事に出た時に、情報に振り回されないように確認して頂きたいことは2つ。

- 1、いったい自分はどうしたいのか?
- 2、副作用の確率は他のものと比較してどれくらいのものなのか(具体的な数字)です。

これは、医療だけでなく、すべての面で応用可能な姿勢だと思います。難しい時もあると思いますが。(私も、自分の専門外の事に関してセンセーショナルな記事が出た時に、このような対応が取れるか、いまひとつ自信がありませんが。

しかし、こんなセンセーショナルな記事を書いて、多くの人を不安に陥れて一体何になるのだろうか?? もっと他に理性的、論理的なやり方があるだろうに、と市井の一医師として思わなくもないです。

(理事 長瀬真彦 ブログより)